



○インドの旅(2)

町の風景⇒



今回は、インドの旅の続編として、「あたりまえと思っていたことがあたりまえでなかった」ことに気づかされた出来事についてです。

海外旅行に行った時、現地の空港に着いてまず私がすることが両替です。ツアーの場合、添乗員や現地ガイドさんが、現地通貨でしか買えないものがあつた時のために少額(1万円程度)両替してくれることが多いのですが、レートが悪い場合もあるため、時間があれば空港の両替所で1万円程度両替することになっています。例えば、100円=1.1\$が空港のレートで、現地ガイドさんのレートが100円=1\$だった場合、空港での両替がよいことがわかんと思います。しかし、空港などの両替所では現地のお金を基準に表現されているため、「1\$ = JPN91.000」などと表示されています。つまり、1万円を換金すると、 $1万円 \div 91 = 109.8\$$ (100円=約1.01\$)になるということです。頭が回らないので、①現地の町の両替所、②空港の両替所、③現地ガイドさん等による両替、④日本の空港等であらかじめ両替、の順番に勝手にレートのよい順を自分で決め、②が安全安心でレートも悪くないと決め込んでいます。

デリー空港でも②を選択しました。1万円両替すると、渡されたのはインドルピーの札束。しかも、日本のように紙の帯封でなく、なぜか巨大なホッチキスで何十カ所も留めてありました。ホテルに着いてから、ホッチキスはずすのに1時間以上かかりました。でも穴だらけのその紙幣を使うことはほとんどありませんでした。なぜかという、現地ではドルや円での支払いを求められたからです。免税店ではカードで払うこともありました。現地が一番信用されている通貨が現地通貨では必ずしもないということです。子どもに片言の日本語で「千円ちょうだい」と言われたこともありました。こうした状況では、インフレが起きることもあります。アフリカのジンバブエでは100兆ジンバブエドル紙幣が発行されたことがあります。最終的には日本円に換算して1円にも満たない価値となり、今ではもう使えなくなっています。話は戻りますが、インドのホテルでは、入口には機関銃等で武装した警備員がいて、一見紛争地の大使館のような感じでした。町で売られているもの、例えばペットボトルなども、水道水や井戸水を入れてふたをしただけのものが売られていることもあるから注意するようにとガイドさんに言われていました。そんな中、町の屋台で買い食いすることは、日本のお祭りで買い食いするのとは状況がまったく違っていました。

余談ですが、同じ頃にトルコ旅行に行った友人が、出発前の添乗員の話、トイレに行っていて聞き漏らし大変な目に遭ったことがあります。それは、「今日本の空港で数千円をドルに換金しておいてください。現地の空港で、帰国の際に空港使用税を一人一人に払ってもらう必要がありますが、トルコリラは使えません。ドルで払うことになっています。現地での両替は難しいです…」という説明でした。聞き漏らした友人は、現地での両替の困難さは想像以上だったと話してくれました。日本で日本円を使うことはあたりまえではないことだと認識しました。

これも余談ですが、現地の水を飲むと腹を壊すと聞いていたので、日本から2リットルのペットボトルを2本持って行きました。現地で買った水は歯磨きなどで使っていました。ですが、腹を壊しました。ガイドさんには、「サラダには水で洗った野菜も入っている。アイスクリームなどにも現地の水は使われている。」と後で言われました。もちろん日本から薬は持って来ていましたが効きませでした。でも不思議とガイドさんからもらった現地の薬を飲んだらききめ抜群でした…。

学んだことは、あたりまえをあたりまえと思わず、感謝し、なにがあたりまえの要因となっているか物事を第三者的に俯瞰して見られるようになることが大事であるということです。そして、「郷に入れば郷にしたがえ」ということ。

最後に、これは20年前の状況であり、訪れた場所でたまたま出くわしただけということもあること。つまり、ステレオタイプに陥らないように読んでいただければ、それこそが多角的複眼的に物事を見ることかと思っています。